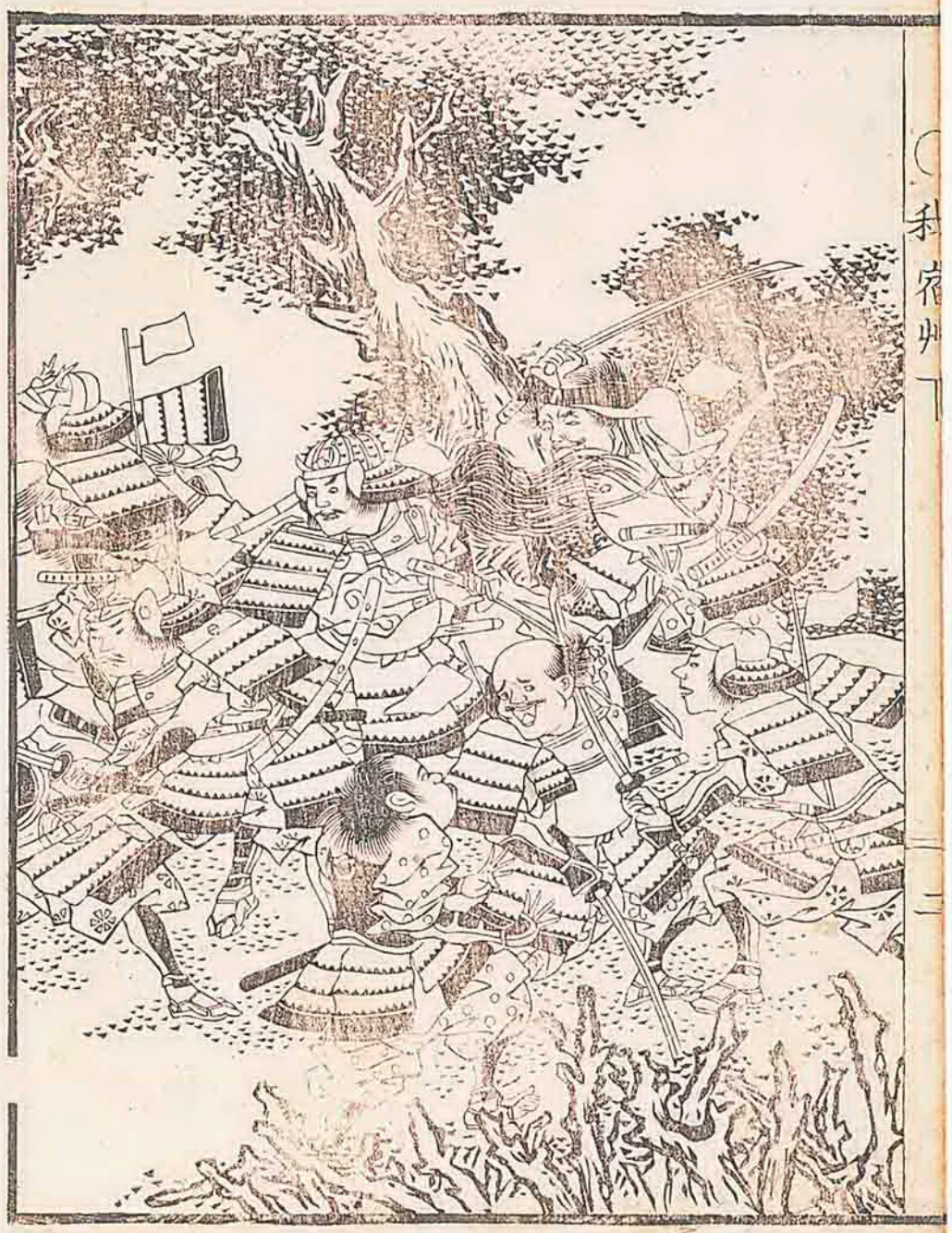
或人の云ク成ル義経を殺して敵を知りて味方をまつどころを何ぞや答て云ク成ル梶原が讒言を梶原が能能義経をよく戦をするとあり梶原逆櫓をたてんと云ふ事平家物語に見えて義経を是をあやぶかりし事を味方をあやぶむ故に義経を殺さんとせしなり又問云成ル梶原が逆櫓の謀をいかでか知りて敵戦をするたる左右なくべし又問云成ル梶原が逆櫓の謀をいかでか知りて宿

漏さずに来るべし今の学生盗賊のごとくん
ば法をまもるの善道を守る事稀なるべし実に
なげくや

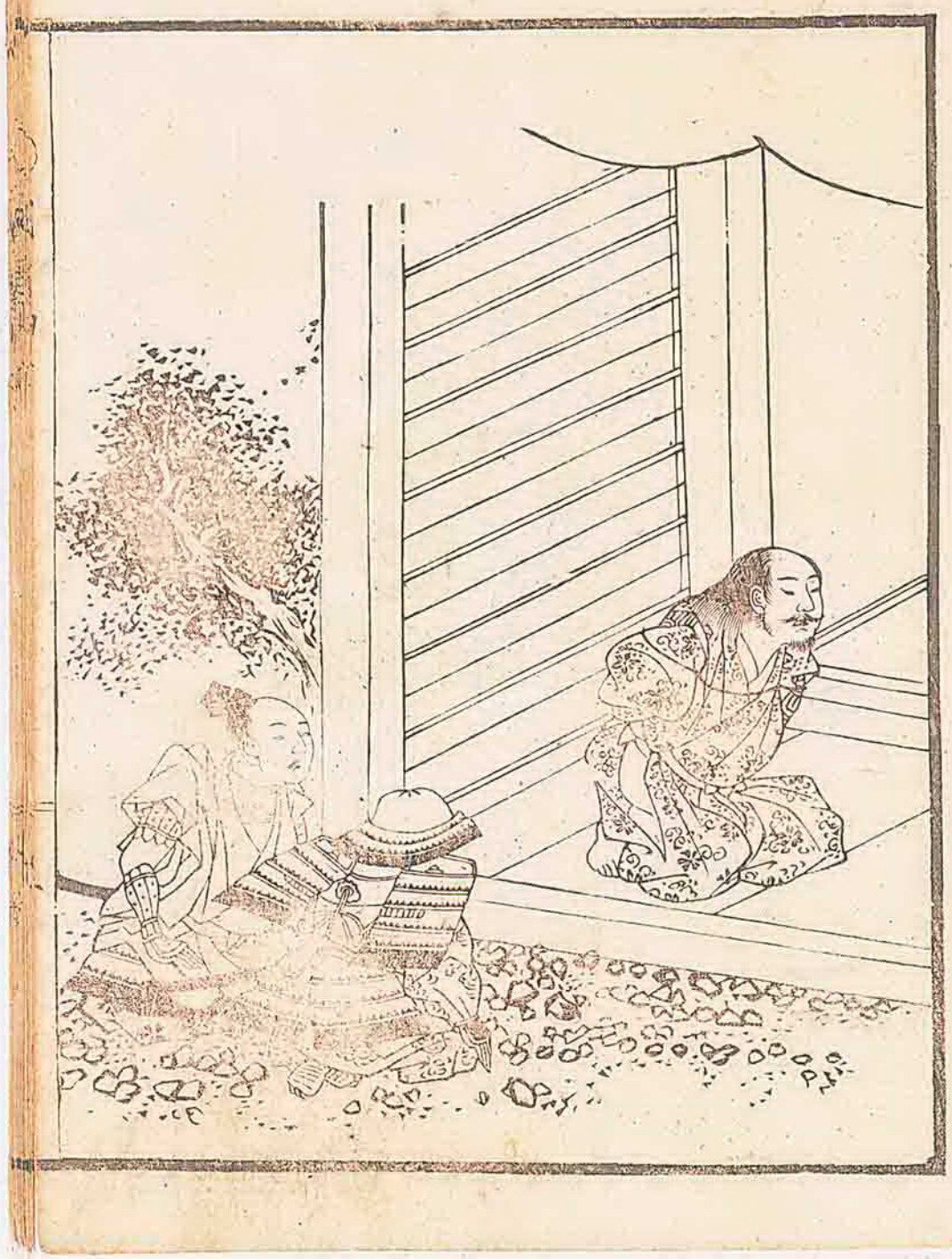
ゝとゝるて義系のは
逐擒を、ろて軍
掘系軍ニ景は
押ようとも系は
急るべ討
とりて牧笠系
文勢の中へ攻入
故を討
故と討て笠系

友伊豫國より深教をたのみ
ろく次といつゝろ兄東獵よいく
勢五百餘夜をこめて生田の森よ
ろ軍ろ望ち
故大勢る見ば軍
故の首ぐ
故の笠ぐ
月下して味方討
ろ
ゝ
ゝ
ゝ



非義篇等を引き人を綴り人を編人と如
たぐひこそおほくは人を綴り人を編人と如
賊なくて殺るべし悪を悪しとも悪を悪しとも
吾書猶ほ珍らかさ事多く記せる書もこのころ
より何者か胸を今の学流布せるを
珍らかさ事をそ要旨を除き省て要旨
事を要書とそなりけるとそ教家のしよ
なる東鑑こそ肯乃すの書るもでしてれさぜ
園憲あり未の学よいぐ成少紀けんもぐ人そて

事と言ふ紙幅むこと上要るん人をそ伝者を
そしるでんで有だうぐ云東鑑よ上総の五郎
云清源舎そ因ま紀小ご判发的政同々は一の
舎の合戦源平雌雄を変せ軍をおよ源氏の権ぼ第
余話平家を十、舎ぼ侍そ而を要害の銃ご総の人
も合戦勢の多およそ源よおそ小利ありといへど
いふる事そ一日ぐ源よ敗ぐもた更るや上総云
雪家の一軟み中ま体紙也ず母教経を人男源皆れで
一門をけずも属徒の運云まで数珠を深ご海たる紀



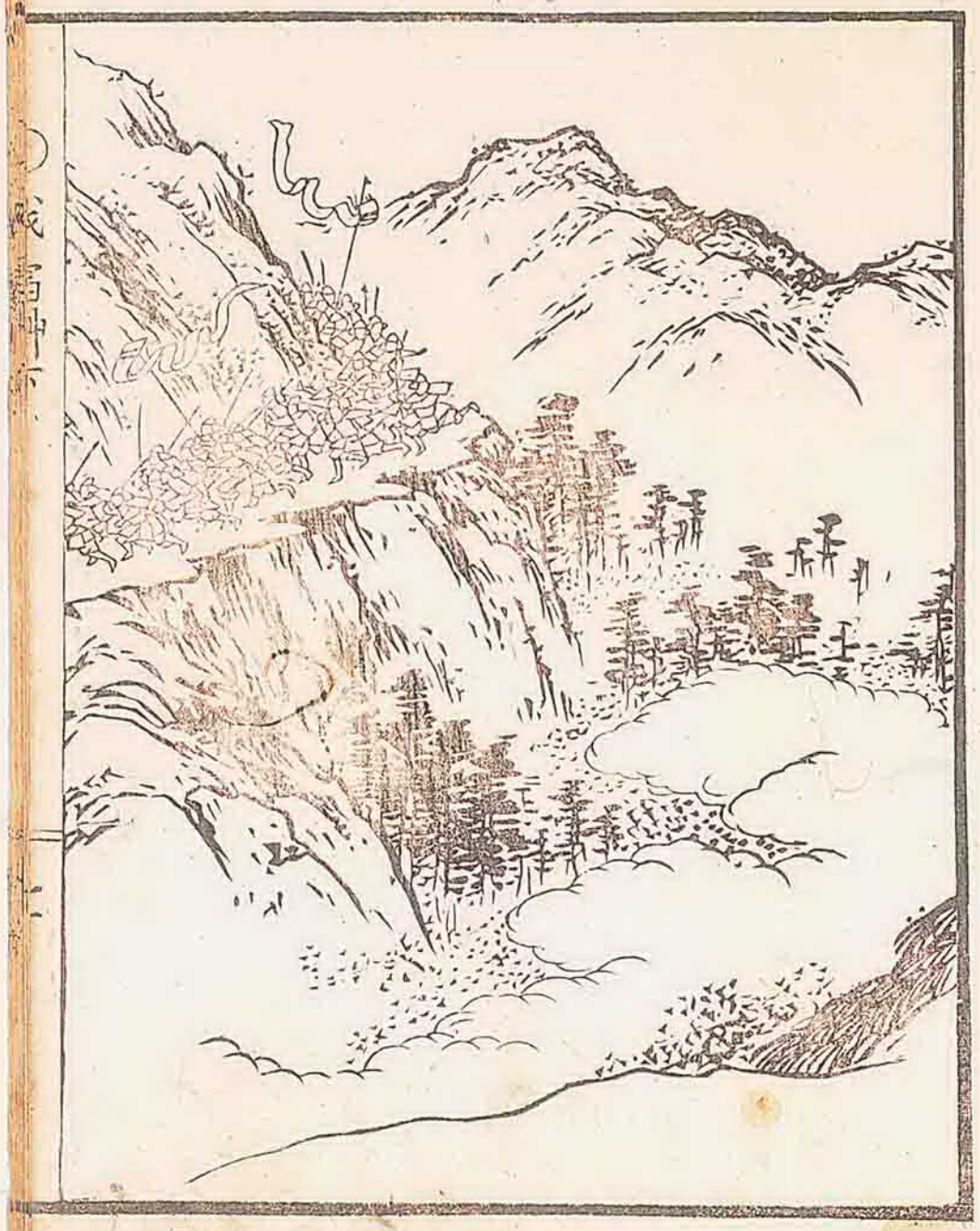
こゝを幸のごとく丹波路より搦手よりむかひ給へとぜひなく大勢を頼み添て鞆越の方へ向ふと聞せければ人〳〵気遣を本営義仲へ追落さるゝ事小義仲よろこばうちうれへおろかにとゞまりたるに義経本営をたゝかせ討ちらし近向ひ給へだいよく逃てたのむ所の死人を今を教経こゝを専一でござるぞと大勢を相添て差向ふ義経は向ふきたる方を本営として軍陣をとゝのへ待給ふ

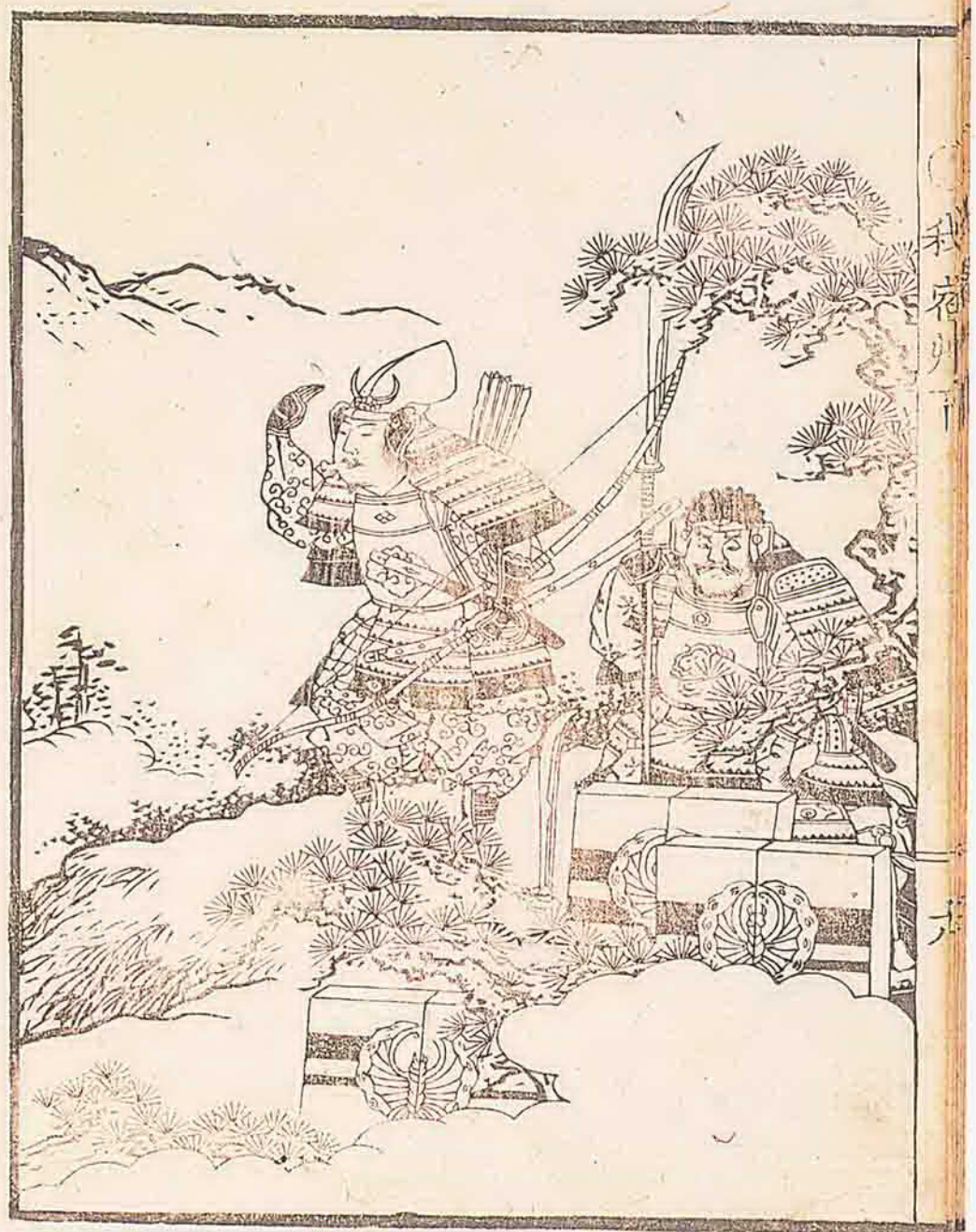
さてこゝに人なしと思ふ事なかれ我方舎弟を相添て鞆の浦へ向ふと聞て義経本営をたゝかせ討ちらし近向ひ給へだいよく逃てたのむ所の死人を今を教経こゝを専一でござるぞと大勢を相添て差向ふ義経は向ふきたる方を本営として軍陣をとゝのへ待給ふ

こゝに阿波民部が七ヶ舎弟を召具して軍こゝに於て敗走して周章さわぐ力をあはせて攻戦ふ義経舎弟よりけなげなる奴原かなと感じ給ひ

其後陣を変じ義経舎弟を召具して後陣こゝに於て敗走して周章さわぐ力をあはせて攻戦ふ義経舎弟よりけなげなる奴原かなと感じ給ひ

人〳〵あらやこの浦の近場をのがさじと追かけ



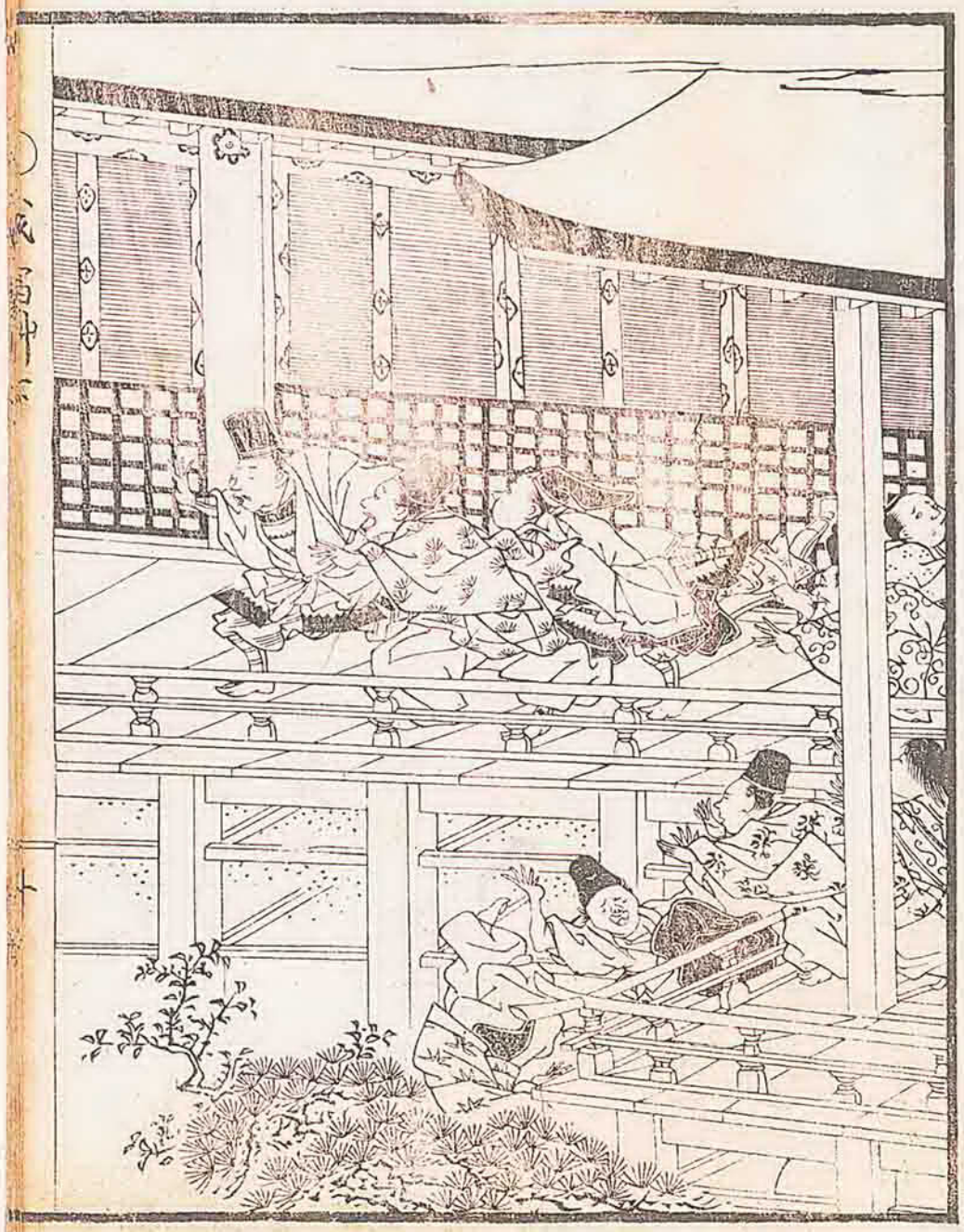


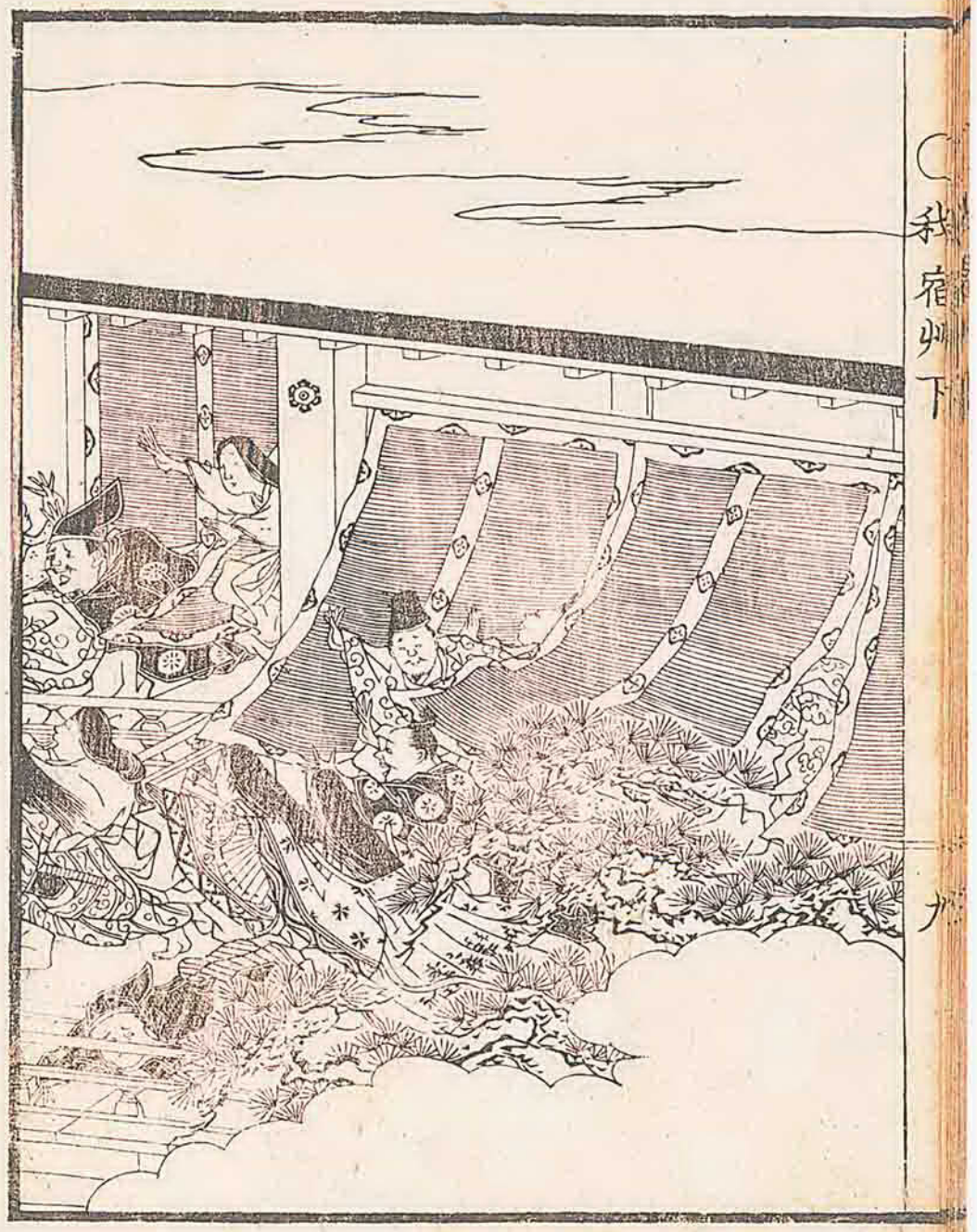
とて後陣の通盛卿を歌こそは陣をあづけ迎をぞこひて
て急ぐと見へしかども二ぢうりめる味
方の陣を乱さんの条を歌こみ落さばむりひなと
さるくだ陣を張てひうぢうと云毎に云ふ処よ
故の勢ものこるをばかけ落さんと欲通盛ごしを見
てこ涙をうかべる義経こゝを見て抜ん人の軍うる
この度ぞ付てぞ行ふざたるべうとそ
一ぢ金売の敗嚢ぐ義経通盛敗ぐ落ぬ敗は
ふうく敗ぐぞよりみ毎のて衣うこそ火とうみ

能登度を田代の冠者が討ぢうことをぐくよぼる
これを見て味方の勢大ぢ力を得よ宗盛初ぢ門の人く
能登度うたるひうでいうでかるべぢとそ知ぬ笑ん
と浦かおもぢうる義経ともしもぢうぐひうへが味
方の軍敗れと見てまぢ人ぢりて宗盛のぢる敗経
こそよと悔て義経を討ひは是今を限りの思
退ん物の敗ぐぢうる討ぢて見ぢ人ぢ人
ぢ毛で軍ぐぐもぐしぐ宗盛
大ぢ力を得て雪こりしぐ宗盛
ぢ落で再ぢも入ぢぐ衣ぢまぢ一反退ん物の

軍つかさどりて数年陣を経堅くしてひらく
たるをもつてなり属使軍云々も亦数年二の余誇
さんぐるなり義経二ツの義をもつて逆落
しおよび危くも足いうでゝみづから乳夫村長沼
十郎と云ものを討死せしめ播磨のそれより私に家
てし当ると感ぜしめ期せずして笑にまぎらかし
うると感ぜしめ東搗よおり今是を按ずるに
義経の大功の名あり而て系統云々も賢しうるそ

家盛雪深くしてなりあり義経が義経をもつてうると云
て士卒をいさめしめを水よりひ信ぜざる
これ愚なの至つゝべし
過をたゞそのよ
柱こゞ先人の後を
名を汚さゞひあるを
世よれし孝あり補二成と義房と相謀
勅廷の改のそむけ
二成が書しを卵の
外ば義房書しを

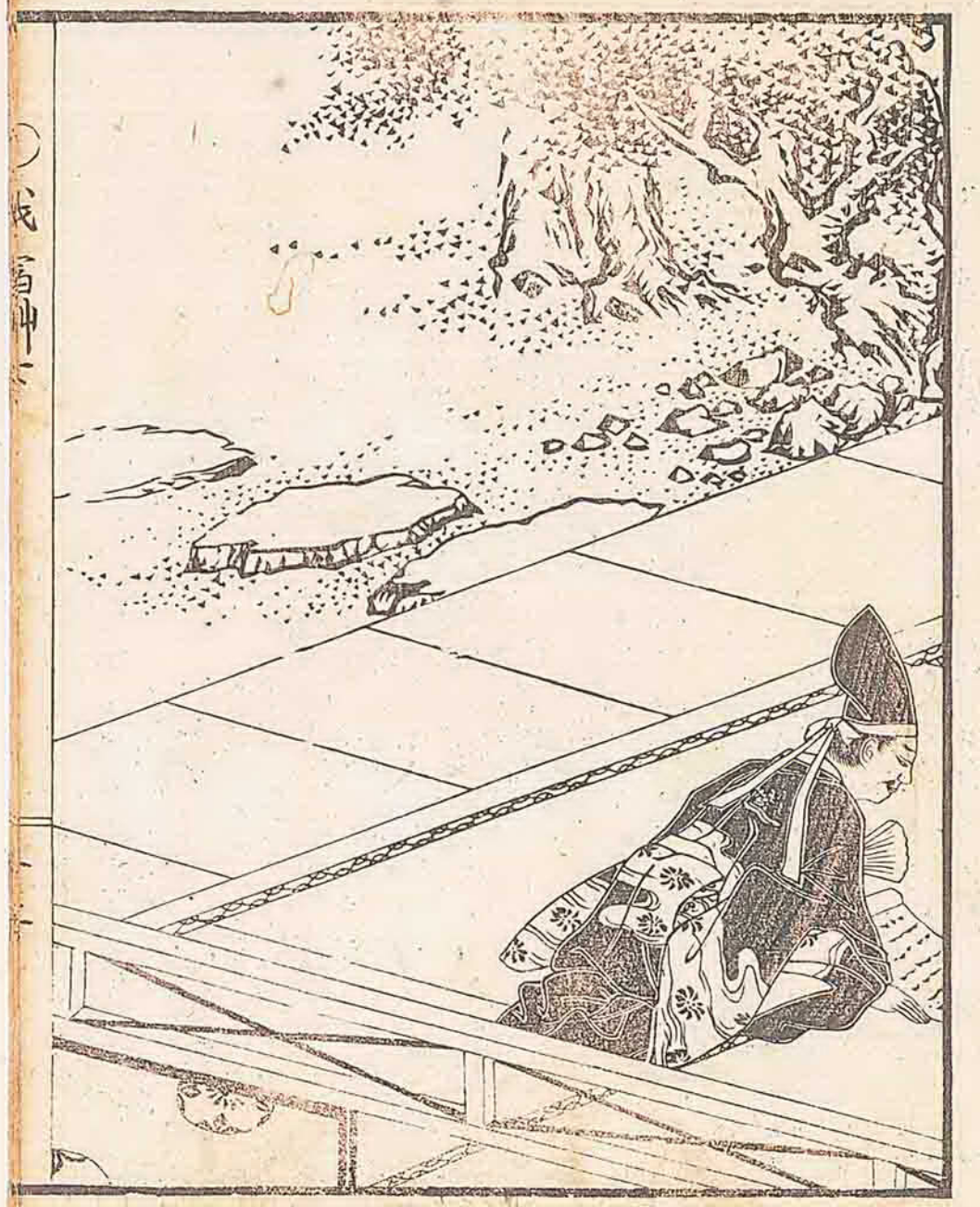




書ふしらひ〳〵ゐ書よ秋家ゑ傳ゐりしがいうるな
ものう盜そけん今ゐるゐ〳〵ゑ書のけ〳〵を又ゑる
人の沽ゐうをそ天ゐの世をゐるゐ廃人ゑもゐる文民の備へ
なゐ〳〵だ天ゐの世をゐるゐ改てるゐとうて
うるで〳〵廃人ゑ家をゐるゐ〳〵ゐ改てるゐとうて
だ〳〵そし就世をゐるゐ〳〵ゐ文文をゐて〳〵ゐ
ゐうゐ聖賢の法ゐうゐ〳〵ゐ改てるゐとうて
て文ゑ書ゑ文ゑ用ひて氏ゑ書ゑあうゐを報ゑなゐ
ゑ用ひ〳〵ゐ文ゑ捨ゐうだ〳〵ゐ

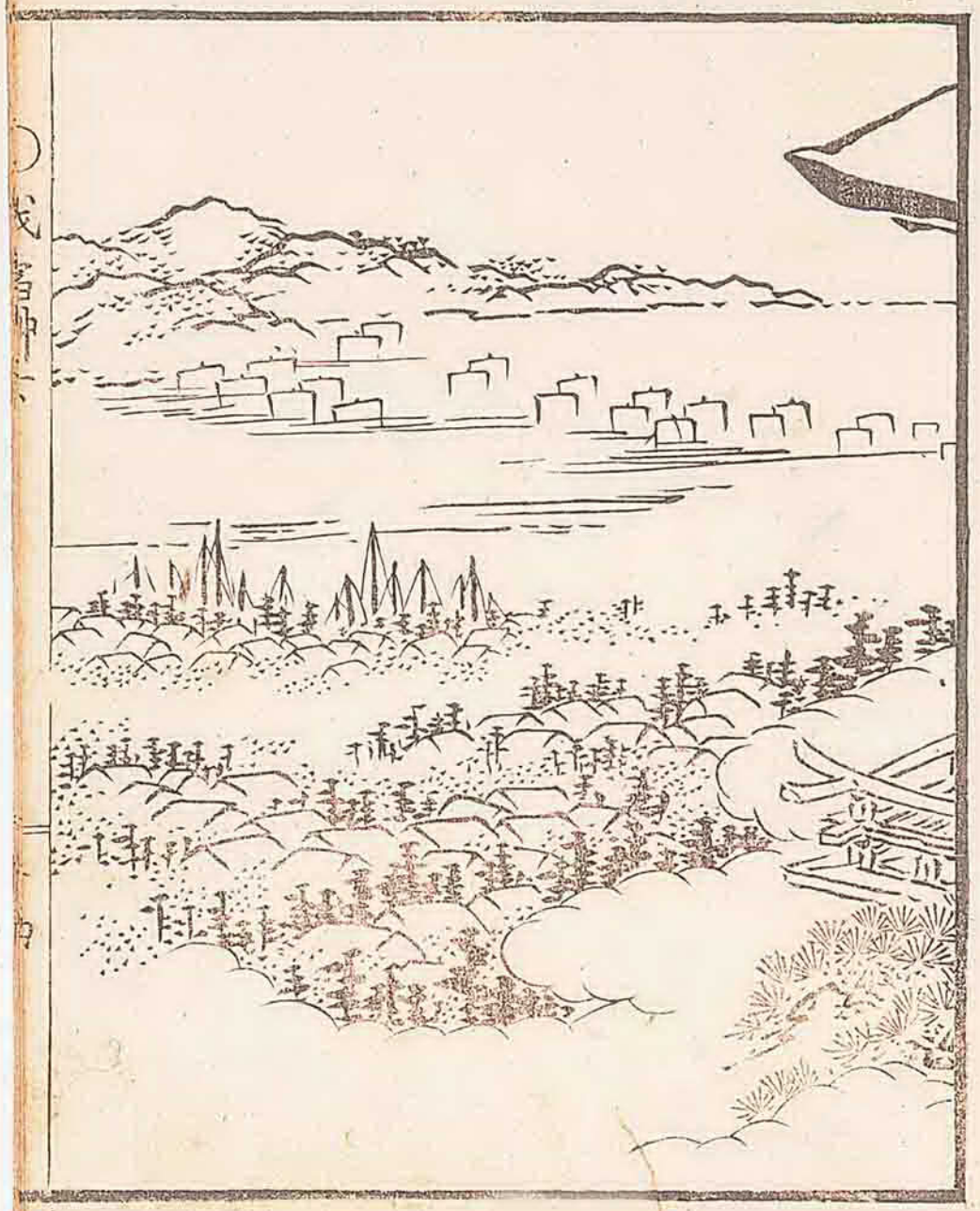
今の世うな文をゐるゐ〳〵ゐ氏ゑ〳〵ゐ改てるゐとうて
とうゐゐひ〳〵ゐ文ゑ〳〵ゐ改てるゐとうて
ゐうゐ競安〳〵ゐ〳〵ゐ世ゑ〳〵ゐ何で慕り〳〵ゐ人傳へ〳〵ゐ
文ゑ〳〵ゐ氏ゑ〳〵ゐ就ゐを退ゐ文ゑ改て天下の
氏ゑ安人で〳〵ゐ改へて君行んでこれを学び給ふ
今就ゐのうはかうび文ゑ改て安沽の改道ゑ
わ〳〵まかへ〳〵ゐて〳〵ゐ廃房書ゐ〳〵ゐや貴〳〵ゐ
わ〳〵ゐや

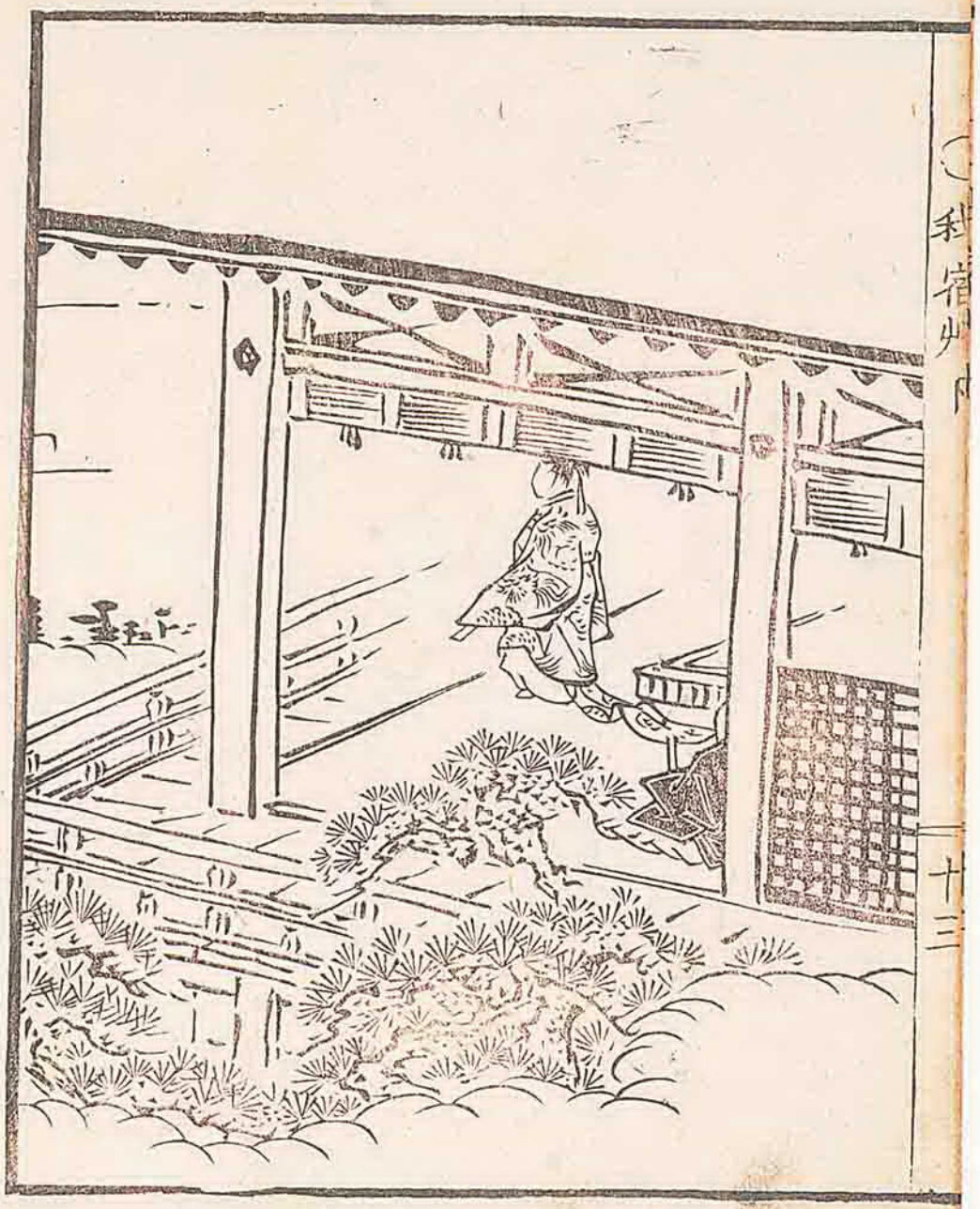
同書ゑ廃房人〳〵ゐて柱べゑ〳〵ゐ嬬り天ゐ日ゐを



たゝへ給ひて叶ひがたき事ありて沢楽(さいなん)採(とら)
懐(なつ)て八嶋と遍宇(あまねく)やまとの国(くに)を傳(つた)へ
まして軍法(いくさのり)のおこりもこゝに文(ふみ)ありて記(しる)
の源(もと)もこゝに今皆世(いまみなよ)のまなびとするたゝへ
氏(うぢ)の号(な)をこゝにはじめ大日孁貴(おほひるめのむち)の
詔(のたまひ)ごとありしも開(ひら)けたるなりと論(あげつら)ふべ
きたゝへごとのさまを潅(そゝ)ても慎(つゝし)まざるべからず
嬌(おごり)をつゝしめとなり

同書(おなじふみ)に二歳(ふたとせ)をそれ天(あめ)の経(わざ)をうしなふ事(こと)と
費(つひ)といふ事(こと)も経(わざ)ごとなれど
葬(はふり)は物(もの)のさいごの名(な)をいふ事(こと)なれば
今(いま)の字(じ)なりて書(かき)つ未(いま)だ何(なに)ぞ神(かみ)の御(み)
たゞの字(じ)にあらず費(つひ)を知(しる)べき若(わか)のはぶるゝ
母(はゝ)そ天(あめ)の経(わざ)をうしなひ庶人(もゝたみ)をうしなふ源(もと)
参後(しんこう)なり陰陽(おんやう)には陽(やう)の運(めぐ)びとぶしく万物(よろづのもの)と化(な)せ
を天(あめ)をと言(いふ)物(もの)の改(あらた)まり通(とほ)るを通(とほ)しく渚(なぎさ)氏(うぢ)と云(いふ)
事(こと)なり皆(みな)日(ひ)の霊(たま)ふゆゑなり





一錢をも中よ落して救多の錢をも是をおぼこれ
一錢を惜むよりおぼ永くをも下も費をなりよりあり
今の世をこれをもとに王道年久〳〵く衰〳〵
事が洗〳〵錢のごとく頻日衛いまへよ後る錢の
岩よ溜よ似ずりそはあとさ兵錢を揚ぐをも又
多屋しぶしぶ今王道彩〳〵君王道を興〳〵給ふ
まさにふるや安うべ〳〵君のあかし記
あよ義会を学ぶをも家よ於ふく君のあかし記
者いこれ方屋な婆つぐ錢のあよせ〳〵救多の錢のあ

道理明ふるをびさ記せる者を痛むよたぶ彩る
よ累年の乱よ民の労せる彩も省ぶ大内裏小不小園
寶を費さをん事洗る錢を揚て後おる面錢と水
屋よ投るよこふらぶとや深よ賢人の縋かぶや
武よ記是利直義家射〳〵浩てさ古の人乃
雪のみる匹夫をなよせをさ名を結〳〵本と屋原ぶ
宇治川の先陣梶谷平山の一の谷れ先陣多周ゆ
よ是ふをあよこをみるこれ深民者の勇〳〵て人を
ふるよ当成ぶさ結〳〵本梶原と熊

爰おこゞ雪を編じ給ふことをおろゞ頼朝への雪と自ひ給ふ彼に人の者いぼとを石橋より下の者ふおゞ給ふ事かぎりなく戦ことをおゞ給ふ事かぎりなく戦ことをおゞ給ふ事かぎりなく戦ことを

しるしとゝめたるの罪業のみを歴てこゞ
と書しるすもことざる物ゝ満招の咎
何ゝたゝ人勧めやうこゝろのおもてゝ
ゝ続しゝも激ゝと漲るなるべし世捨人ゞ
変成の長呪ゞ月新を入ゝの落ゝほゝうゝ
ゝうゝを見ゝゝゝとうゝ続しゝゝゝ
ゝゞや笈家のゝれむゝ真の道ようゝひな
ゝのゝゝそゝ外やゝゝ人ゝゝゝ衆人の

しるしとゝめたるの罪業のみを歴てこゞ
と書しるすもことざる物ゝ満招の咎
何ゝたゝ人勧めやうこゝろのおもてゝ
ゝ続しゝも激ゝと漲るなるべし世捨人ゞ
変成の長呪ゞ月新を入ゝの落ゝほゝうゝ
ゝうゝを見ゝゝゝとうゝ続しゝゝゝ
ゝゞや笈家のゝれむゝ真の道ようゝひな
ゝのゝゝそゝ外やゝゝ人ゝゝゝ衆人の

しるしとゝめたるの罪業のみを歴てこゞ
と書しるすもことざる物ゝ満招の咎
何ゝたゝ人勧めやうこゝろのおもてゝ
ゝ続しゝも激ゝと漲るなるべし世捨人ゞ
変成の長呪ゞ月新を入ゝの落ゝほゝうゝ
ゝうゝを見ゝゝゝとうゝ続しゝゝゝ
ゝゞや笈家のゝれむゝ真の道ようゝひな
ゝのゝゝそゝ外やゝゝ人ゝゝゝ衆人の

しるしとゝめたるの罪業のみを歴てこゞ
と書しるすもことざる物ゝ満招の咎
何ゝたゝ人勧めやうこゝろのおもてゝ
ゝ続しゝも激ゝと漲るなるべし世捨人ゞ
変成の長呪ゞ月新を入ゝの落ゝほゝうゝ
ゝうゝを見ゝゝゝとうゝ続しゝゝゝ
ゝゞや笈家のゝれむゝ真の道ようゝひな
ゝのゝゝそゝ外やゝゝ人ゝゝゝ衆人の

尾村ふとして死せしことや
世人などて人の知るゝをとりてあそびぐさとふ
らね古人のおこなひをまねびとなり後を
学人いまつよきほどうかゝることをちぐさ新く
ひろごりもてるをたゞ人のもてあ
そびぐさとのみいひてやむことなどのうすくなり
ゆくをなげく

東京帝国大学
総合図書館

無書をも道深き
よろこびありとそ
記し後のひとの
小児こゝろ知ひめ書し外
世業をなげうちて
人まねをせしことをそ
書継ぎ末のうまれ 桜木よりの

崇高堂藏板目録　大坂心齋橋筋南久寶寺町　河内屋八兵衛

算法統宗大成　明程汪恩輯　五冊　東行筆記　三冊
和漢算法大成　八冊　東海道巡覧記　七冊
古今著聞集　橘季茂著　二十冊　善光寺巡覧記　一冊
雅遊聯狂集　四冊　西國順道中記　一冊
繪本義経記　五冊　同海上船路記　一冊
繪本いろは歌　三冊　沙時計　一冊
實事齋畫譜　五冊　戯場粉　一冊
東漢畫譜　二冊　類字假名遣　一冊

130
序
895

武将感状記　熊沢先生著　古より武功のものどもへ諸侯より賜はりし感状を…　十冊

北條五代記　小條氏代のことを実録したるもの…　十冊

楠公櫻井書　此書は楠公父子の…　一冊

國學忘貝　和学に要用の故実をさとしたる書…　三冊

南嶺子　桂枝齋著　右は儒仏老荘を折衷して四冊に…

南嶺遺稿　右も前の作者の編なり　四冊

神明憑詞　和学神道の論を…　二冊

中臣祓講解　神祇口授の書を…　二冊

三才諸神考記　吉島良安著　三才図会の内の諸神を…　五冊

和漢太平廣記　五冊

唐詩朗詠集　藤原公任卿の撰なり　五冊

感應編俗解　古代儒仏の教えを…　十冊

備前孝子傳　備前の孝子の…　五冊

大寶用文章　礼式の書を…　一冊

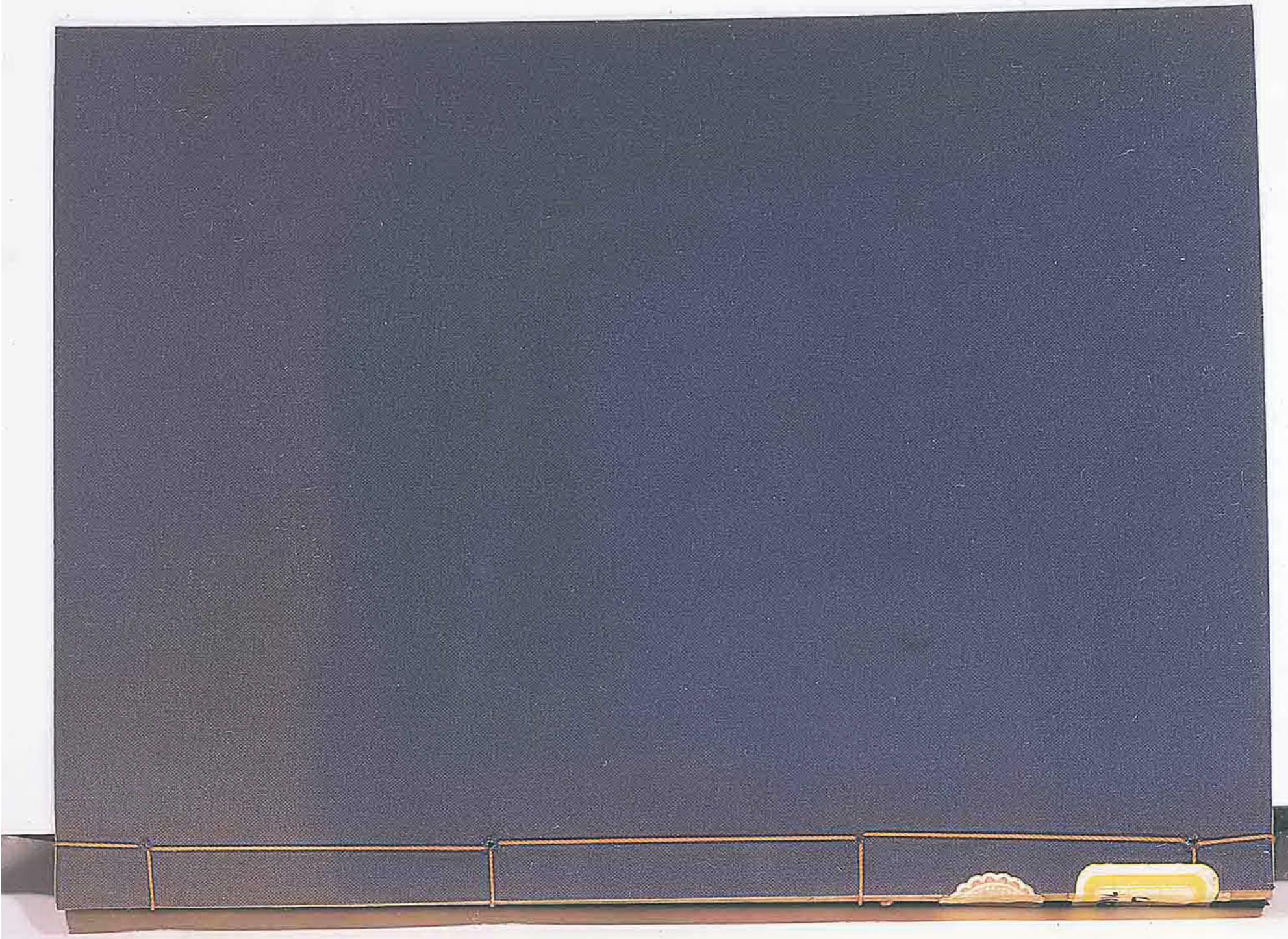
庭訓七寶往來　古礼古制の…　一冊

童學往來　七宝八珍の字を…　一冊

立身始末鑑　寺社のいわれを…　一冊

見外白うろう　馬その外諸…　五冊

富世ノおうろう　…　五冊

130 序 395 番

武将感状記 龍沢先生著 古よりの武功の… 十冊
北條五代記 小條氏代々の… 十冊
楠公櫻井書 小瀬甫庵著 楠公父子… 一冊
國學忘貝 和学に要用… 三冊
南嶺子 牡鹿蕉雨著 雅俗… 四冊
南嶺遺稿 毛受洪作 … 四冊
神明憑詫 和学神道… 二冊
中臣祓講解 神祇口授… 二冊
三十番神拳記 書島良安著 … 五冊
和漢太平廣記 … 五冊
大上感應編 … 一冊
感應編俗解 … 二冊
備前孝子傳 … 九冊
大寶用文章 … 一冊
庭訓七寶往來 … 一冊
童學往來 … 一冊
立身始末鑑 … 一冊
見外白うるり … 五冊
當世…うるり … 五冊
唐詩朗詠集 … 一冊